

第五章 逆接仮定条件

逆接仮定条件は、前件と後件とがともに未知かつ非事実の要素からなり、「～テモ」で結び付く条件表現である。ところで、逆接仮定条件は、文面では、前件が後件の条件として働かないということを表わしているが、これは、順接仮定条件「pナラバq」を想定して、この「pナラバq」のpとqがかみ合わないということに支えられてこそ成り立つわけである。以下、「～テモ」で結び付く逆接仮定条件の論理構造を分析し、論理式で記述する。これによって、順接仮定条件に用いられる「～テモ」との区別も明らかになると思われる。

1 「～テモ」形式

1.1 意味構造

逆接条件には、「～テモ」「～ノニ」といった言語形式が用いられ、逆接条件文、または譲歩文と呼ばれる。坂原(1985)は、「～テモ」を仮定的譲歩文及び反事実的譲歩文、「～ノニ」を事実的譲歩文として区別しており、小泉(1987)や鈴木(1978)も、「～テモ」は仮定条件、「～

ノニ」は既定条件を表わすとするなど、言語形式によって逆接仮定条件と逆接確定条件を分けることが多い。だが、才田(1980)、言語学研究会・構文論グループ(1986)、戸村(1988)などで指摘されているように、「～ても」には仮定的用法以外に確定的用法もある。益岡・田窪(1992)によれば、「～ても」で表わされる譲歩の表現は、ある2つの事態間の依存関係をいったん仮定し、それが必ずしも成り立たないことを述べるが、既に成立した事態に関して、その帰結として成り立つと予想された事態が、予想に反して成り立たなかったことを表わす場合もあるとされる。このように、「～ても」が、逆接仮定条件のみを表わすのか、それとも逆接仮定条件と逆接確定条件の両方とも表わすものなのか、ということに関してはいろいろと議論されている。また、逆接仮定条件「～ても」に関する見方は、さらに二分されている。例えば、山田(1936)や坂原(1985)は、「pナラバq」に対する「pても～q」を、鈴木(1978)や言語学研究会・構文論グループ(1986)は、「pナラバq」に対する「～pてもq」をそれぞれ逆接仮定条件と見ている。本研究では、「～ても」は、逆接仮定条件や逆接確定条件のみならず順接仮定条件にも用いられると考える。以下、逆接仮定条件の意味構造の分析に先立って、逆接仮定条件「～ても」の見方に関する先行研究をいくつか紹介する。

山田(1936:544)は、「～ても」について、複語尾「て」や格助詞「で」に「も」が属して反対の結果を導く条件を示すものだといっている。

坂原(1985:124)は、譲歩文「pであってもqでない」を条件文「pならばq」の否定と見ており、譲歩文ではpと～qの関連が問題になっているのではなく、pとqの関連の否定が意味されていると指摘している。条件文「pならばq」は暗黙の前提を持ち、この前提が成立しないなら、否定されることがあり、譲歩節とは、補助仮定の不成立により、期待される結果を実現し損なった仮定節にすぎず、いうなれば、途中で挫折した前件である(坂原(1985:125))。

一方、鈴木(1978)は、

「～のに」は既定の逆接条件を表わすもので、その特徴は、「当然そうなるはずなのに、期待に反し、実際はそうならず、意外だ、不服だ」という意味あいの事ながらを述べるところにあるが、「～ても」

にはある事がらを仮定して示し、その条件から拘束を受けることなく、後件で述べる事がらが成立するという関係を示す用法があり、この外、既定条件や一般条件を表わすものもある。

として、逆接確定条件「～ノニ」と逆接仮定条件「～テモ」とを対比させている。

言語学研究会・構文論グループ(1986;49)は、逆接条件文を、うらめ的なつきそい・あわせ文と呼んでいる。二つの出来事の間にある、《条件づける》と《条件づけられる》との関係のもっとも典型的な場合を原因・結果の関係として、うらめの現象を、

原因・結果の関係がなんらかの、べつの要因が作用することで、こわされてしまうことがある。このとき原因であるべき出来事が原因としてはたらくことができず、当然おこるべき結果を生じないのである……。

と説明している。さらに、

このうらめ原因的な関係においては、つきそい文にさしだされる出来事が原因として有効にはたらかず、いいおわり文にさしだされる出来事を排除してしまうことができない。あるいは、つきそい文にさしだされる出来事は、いいおわり文にさしだされる出来事の成立にとって不都合であり、かつ妨害的であるが、それにもかかわらず、いいおわり文にさしだされる出来事は成立する。

と述べて、うらめ的なつきそい・あわせ文を、想定通りには後件が成り立たない場合と想定通り後件が成り立つ場合との二パターンに分けているが、これは仮定条件と確定条件の区別ではなく、逆接確定条件「～ノニ」と逆接確定条件「～テモ」とをそれぞれ指すものである。構文論グループ(1986;50)は、逆接仮定条件に関しては、

それ(＝うらめ原因的な関係)が条件的であれば、つきそい文にさしだされる出来事は仮定されたものであって、ポテンシャルであるか、それとも非レアルである。……条件的なうらめ原因的な関係は、「しても」によってのみいいあらわされている。

と述べている。なお、逆接確定条件「～テモ」については、「はなし手が状況を更新していくことから、うらめ原因的な関係は事実的なものから条件的なものへと展開していく」と述べ（構文論グループ(1986;52)）、逆接仮定条件「～テモ」は想定通り後件が成り立つものであるとしている。

逆接仮定条件が想定している順接仮定条件を「pナラバq」として、以上の先行研究をまとめると、次のようになる。

坂原(1985)は、「pナラバq」におけるpとqの関連はそのまま保たれていても、暗黙の前提が満たされないと「pテモ～q」になるとしており、山田(1936)も、「～テモ」を反対の結果を導く「pテモ～q」だとする。ただし、坂原(1985)は、「pテモ～q」は、「pナラバq」における暗黙の前提が満たされないときの形であるにすぎず、pとqは変わらず関連を持っていると見ている。一方、鈴木(1978)や言語学研究会・構文論グループ(1986)は、逆接仮定条件の場合、p以外の条件なら何でも「～テモ」の前件に来られると見ており、「pナラバq」に対する「～pテモq」を逆接仮定条件の形式と見ているわけである。ただし、言語学研究会・構文論グループ(1986)は、「～pテモq」を、原因・結果の関係が別の要素の作用でこわれてしまい、前件と後件が関連を持たなくなった場合と見ており¹⁾、坂原(1985)との違いを見せている。

さて、本研究では、「pナラバq」に対する「～pテモq」は順接仮定条件と見なしている。第三章で述べているように、前件と後件が未知の事柄の「～テモ」は、四つの論理構造を持つ。すなわち、「～pテモq」の付け加えと解釈される含意「 $p \supset q$ 」、等値「 $p \equiv q$ 」、後件肯定「 $p \sqcup q$ 」の順接仮定条件と、「pテモ～q」の食い違いと解釈される逆接仮定条件である。つまり、「～pテモq」は、～pがqの成立にとって「不都合であり、かつ妨害的」（構文論グループ(1986)）であるものの、「pナラバq」という想定通り後件が成り立っているため、順接仮定条件と見るべきである。このことから、本研究では、「pナ

¹⁾ 「pノニ～q」についても同じように述べている。

ラバq」に対する「pテモ～q」²⁾のみを逆接仮定条件だとする。次の例を見てみよう。

(1) 5番バスに乗っても、市内に出られない。

(1)は、pとqをどう設定するかによって、順接仮定条件と逆接仮定条件とに二分される。このことは、(1)の「～テモ」が、順接仮定と逆接仮定の両方の論理構造を持っているということを意味する。まず、(1)において、「5番バスに乗れば、市内に出られる」を想定し、「5番バスに乗る」をp、「市内に出られる」をqとすると、(1)は、「前件真、後件真」の【2】の場面では発話できず、「前件真、後件偽」である【3】の場面で発話される逆接仮定条件となる。

【2】 5番バスに乗るトキ、市内に出られる。

【3】 5番バスに乗るトキ、市内に出られない。

今度は、(1)において、「～テモ」の後ろの文はそのまま固定し、「～テモ」の前の文を変えて、「5番バスに乗らなければ、市内に出られない」を想定し、「5番バスに乗らない」をp、「市内に出られない」をqとしよう。すると、(1)は、「前件偽、後件偽」となる【2】と、「前件偽、後件真」となる【3】の両方の場面で発話できる含意、【2】の場面で発話できず、【3】の場面で発話できない等値、【2】の場面で発話できず、【3】の場面で発話できる後件肯定の三つに分かれる順接仮定条件となる。

さて、(1)を逆接仮定条件と見た場合、(1)が、「前件真、後件真」の【2】の場面で発話できず、「前件真、後件偽」の【3】の場面で発話できるということは、想定している文である「5番バスに乗れば、市内に出られる」の文面の意味構造と逆になる。つまり、(1)の「5番バスに乗っても、市内に出られない」は、「5番バスに乗れば、市内に出られる」の否

²⁾ ただし、「pナラバq」が、例えば「努力しなければ、成功しない」のように、元々の後件が否定の形である場合、「pテモ～q」の後件は「努力しなくても、成功する」のように肯定の形として現われる。

定となるわけである。ただし、「pナラバq」の否定は「pナラバナイq」とするわけにはいかず、否定を表わす「～ナイ」を「pナラバq」の後ろに付けなければならないが、このとき「～ナラバ」は「～テモ」に変わり、「pテモqナイ」という形になる。坂原(1985;124)も指摘しているように、「pテモqナイ」は、形の上では、pと～qの関連が問題になっているような印象を与えるが、実際は、pとqの関連の否定が意味されている。ところで、(1)の「pテモqナイ」が「pナラバq」の否定だとすると、(1)は、「前件偽、後件真」の【4】の場面でも、「前件偽、後件偽」の【5】の場面でも発話できないことになる。

【4】 5番バスに乗らない（市内に出られないバスに乗る）トキ、市内に出られる。

【5】 5番バスに乗らない（市内に出られるバスに乗る）トキ、市内に出られない。

つまり、(1)は、次の【6】の意味構造を持っており、前件が真のときは文面の意味構造を、前件が偽のときは基底の意味構造を成している。

【6】 5番バスに乗るトキ、市内に出られることはなく、カツ	}	文面の意味構造
5番バスに乗るトキ、市内に出られず、カツ		
5番バスに乗らない（市内に出られない、5番以外のバスに乗る）	}	基底の意味構造
トキ、市内に出られることはなく、カツ		
5番バスに乗らない（市内に出られるバスに乗る）トキ、市内に出られないことはない。		

結論を述べると、前件と後件がともに未知の「～テモ」は、四つの論理構造を持っている。すなわち、含意、等値、後件肯定の三つの順接仮定条件と逆接仮定条件である。ところで、「～テモ」が順接仮定条件と逆接仮定条件とに二大別されるのは、文面の意味構造によるものである。つまり、含意、等値、後件肯定は三つとも、文面の意味構造が、「前件真、後

件真」のとき真、「前件真、後件偽」のとき偽となるが、逆接仮定条件の場合は、「前件真、後件真」のとき偽、「前件真、後件偽」のとき真となるのである。一方、「～テモ」が四つの論理構造に分かれるのは、基底の意味構造によるが、それは、基底の意味構造を成す組み合わせの「前件偽、後件真」と「前件偽、後件偽」のとき、含意の場合は真と真、等値の場合は偽と真、後件肯定の場合は真と偽、逆接仮定条件の場合は偽と偽になることから分かる³⁾。そして、「～テモ」は、周りの状況により、「～テモ」に内在する、これら四つの論理構造のうちのどれかに解釈されるわけである。ただし、「～テモ」がどう解釈されるかは、「～テモ」の「モ」とも関わりがあるように思われる。以下、逆接仮定条件に用いられる「～テモ」に付く「モ」について触れておきたい。

山田(1936:545)は、例えば、「あなたの御恩は死んでも、忘れませぬ」のような文における「～テモ」の「モ」について、

この「も」は文語に用いる「とも」「ども」の「も」の特別に発展したるものならむか。されど元来その「も」には反発の意味のなきものなるが、「とも」「ども」の慣用久しきにつれて、いつしか「も」にこの意あるが如き意識生じて、この「も」にて反接の用をなすに至りしものと考へらる。

と述べ、「～テモ」が反対の結果を導く意味を持つのは「モ」によるものであるとしつつも、逆接の意を成す「モ」以前に、反発の意味のない「モ」があったことにも触れている。後者の反発の意味のない「モ」とは、順接仮定条件「～p テモq」の「モ」のことだと考えられる。

沼田(1986b)は、仮定条件の形式副詞句を「も」がとりたてる場合として「～テモ」を考察している。そして、単純他者肯定の「も₁」、意外の「も₂」、柔らげの「も₃」のうち⁴⁾、逆接仮定条件「～テモ」と関わりを持つ意外の「も₂」について、

³⁾ 含意、等値、後件肯定の順接仮定条件の詳細は、第三章を参照すること。

⁴⁾ 単純他者肯定の「も₁」、柔らげの「も₃」については第三章で述べた。

意外の「も」が、仮定条件を表す「と」「ば」「たら」「なら」の形式副詞句をとりとたてる場合も、……「も」と同様である。つまり、「*とも」「*ばも」「*たかも」「*ならも」は言えず、交代形の「て」形を使うのである。ただし、この場合は、必ず副詞句と主文の間に逆接的な意味が読みとれるところに、「も」との違いがある。……「ても」が逆接の意味に解釈できるのは、「も」が「も」であるためであり、また「も」である時に限られる。「も」や「も」の時には、逆接の解釈はできない。

と述べている。沼田(1986b)は、「も」を表わす例として、

(7) a. 太郎はほめられると怒る。

b. (ほめられると怒る人はないはずだが) 太郎はほめられても怒る。

を挙げ、(7)のb.文は、「も」がa.文の形式副詞句「ほめられると」をとりたてたものだとしている。沼田(1986b)によれば、(7)のb.文は、「主張として「ほめられる」を「怒る」に対し肯定するが、含みは、ほめられる場合以外の他者—例えばからかわれる場合—では怒ると思ったが、ほめられると怒らないと思った、という期待であり、(7)b.の主張は、「ほめられると怒る」のように含みの期待に反することを述べるもので、(7)b.は逆接的な関係を表している」とされる。さらに、沼田(1986b;28)は、

…a文の中の形式副詞句をつくる「と」や「たら」、それに「ば」、「なら」といった形式副詞は、従来も順接の仮定条件を表わすといわれるほどで、もともと逆接の解釈には適さないものである。……しかし条件を逆接的に表現したい場合は、とにかくあるのである。この場合「と」「ば」「たら」「なら」などだけでは、この逆接的条件は表現できない。そこで意外の「も」や「さえ」を使えばいいのであるが、上述したように、「と」「ば」「たら」「なら」にとりたて詞はつくことができない。そこで「も」の場合と同じように、条件の副詞句が交代形の「て」形副詞句となり、「も」がつくことになるのである。

と述べている。

ところで、沼田(1986b)が逆接条件を表すとしている(7)b.のような「も」は、実は「も」と同じく順接仮定条件「～ても」の「も」にすぎないものと思われる。(7)a.における、「ほめ

られる」と「怒る」は、これらの意味内容から、逆接の関係にある事柄同士であると考えられる。しかし、(7)b.は、(7)a.「ほめられると、怒る」の前件がとりたてられているにすぎず、文の意味が自然とは言えないまでも(7)a.を順接仮定条件と見る限り、(7)b.も順接仮定条件とであると考えざるをえないのである。仮に、(7)b.の文を括弧の中の内容と合わせて考えると、逆接仮定条件と読み取れるが、このような逆接仮定条件は(7)a.を想定してはいない。そのため、(7)b.が(7)a.から引き出されたとすると、(7)b.は、括弧の中の内容は取り除き、順接仮定条件と見なさなければならない⁹⁾。それぞれの事柄の意味に囚われないように、前件と後件が特別の意味的な関連を持たない、次のような例を考えてみよう。(8)の「～ても」に、(8')や(8'')の括弧のような「pナラバq」を想定すると、(8')は順接仮定条件、(8'')は逆接仮定条件と解釈できることが分かる。

(8) 彼に聞いても、分かる。

(8') (彼女に聞けば、分かる) 彼に聞いても、分かる。

(8'') (彼に聞けば、分からない) 彼に聞いても、分かる。

つまり、上の(8)の「～ても」は、(8')の順接仮定条件と(8'')の逆接仮定条件の二つの解釈が可能である。ただし、ここで肝心なのは、「何をqとするか」ということである。括弧の点線で示しているように、(8')と(8'')はqが異なっている。つまり、「も」が付いてもqが変わらない(8')は順接仮定条件の解釈に、「も」が付くことでqが否定されてしまう(8'')は逆接仮定条件の解釈になるのである。そこで、本研究では、想定文のqが否定される場合に付く「も」だけを、意外の意味合いが与えられ、逆接の解釈を生む「も₂」だと見なすことにする。なお、逆接仮定条件は、想定している順接仮定条件の前件がとりたてられたの

⁹⁾ この場合、(7)b.の前件「ほめられる」は、「太郎はほめられてもほめられなくても怒る」のように「ほめられない」と対比されるようになる。これは、「何があっても、後件が成り立つ」の意味になり、後件肯定の読みになりやすい。特に、後件肯定は「pても～pてもq」であり、合わなさそうな～pとqが「～ても」で結ばれているため、解釈の際、逆接仮定条件との混同が起きたりするのであろう。

ではなく、想定していた順接仮定条件が思う通りに行かないことを表わしているものである。

よって、本研究では、とりたてて詞「モ」の付く「 \sim テモ」は「 $\sim p$ テモ q 」で表される順接仮定条件と見なし、逆接仮定条件「 \sim テモ」は、「 \sim テモ」自体が「 \sim ナラバ」の否定であるとするようにする。ただし、順接仮定条件と逆接仮定条件の区別においては、何を q とするかということが重要となる。何を p とするかは順接仮定条件の三つの論理構造と関わっている。つまり、「 p ナラバ q 」と同じ後件を持つ「 p テモ q 」と「 $\sim p$ テモ q 」とは両方とも順接仮定条件であるが、後件が変わる「 p テモ $\sim q$ 」は逆接仮定条件となるわけである。なお、本章では、「 p テモ q 」と「 $\sim p$ テモ q 」の区別は特にしない。

以下、逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」と順接仮定条件「 $\sim p$ テモ q 」との違いについて触れておきたい。それにより、逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」がより明らかになると思われる。言語形式「 \sim テモ」からは、想定通りに後件が成立しない場合と、前件の不成立にもかかわらず後件が成立する場合の二通りの形式がまず考えられる。例えば、「努力する」を p 、「成功する」を q とすると、次の(9)の「 p ナラバ q 」が想定され、(10)は「 p テモ $\sim q$ 」の逆接仮定条件、(11)は「 $\sim p$ テモ q 」の順接仮定条件になる。

(9) 努力すれば、成功する。

(10) 努力しても、成功しない。

(11) 努力しなくても、成功する。

(10)は、想定文である(9)の前件「努力する」の下で、想定文の後件「成功する」が真になるはずなのに、「努力する」が真だと仮定しても「成功する」は真にならず、想定通りにならない、ということを表わしている。一方、(11)は、想定文である(9)の前件「努力する」が真のとき、(9)の後件「成功する」が真になるのはもとより、それに加えて、(9)の前件が否定され、偽である「努力しない」場合も、後件「成功する」は真になる、というこ

とを表わしている。ところで、(10)や(11)が想定している順接仮定条件を、(9)でなく、次の(12)と見なすことも可能である。(12)では、(9)と異なり、「努力しない」がp、「成功しない」がqである。

(12) 努力しなければ、成功しない。

もし、(12)を、(10)や(11)が前もって想定している文だとすると、(10)は「 $\sim p$ テモq」の順接仮定条件に、(11)は「pテモ $\sim q$ 」の逆接仮定条件になる。どのような順接仮定条件を想定するかによって、言い替えれば、何をqとするかによって、「 \sim テモ」文は順接仮定条件とも逆接仮定条件とも解釈できるわけである。

さて、先行研究によっては、「 \sim テモ」さえ入っていれば逆接仮定条件と見なして、「pテモ $\sim q$ 」と「 $\sim p$ テモq」を区別しないこともある。(9)を想定文とした場合、「pテモ $\sim q$ 」形式になる(10)とともに「 $\sim p$ テモq」の(11)をも逆接仮定条件だとするのである。しかし、(10)の「 \sim テモ」が、想定文の(9)の前件と後件がかみ合わないと主張する逆接仮定条件であるのに対し、(11)の「 \sim テモ」は、想定文の(9)の前件の否定も「 \sim テモ」文の後件と対応できることを表わす順接仮定条件である。従って、(10)と(11)は区別されるべきである。

このように、(10)と(11)は、(9)という同一の順接仮定条件を念頭に置きながらも、逆の意味として表現された別個の「 \sim テモ」である。つまり、(10)は(9)にとって「食い違い」の表現であるが、(11)は(9)にとって「付け加え」の表現だとも言えるわけである。ただし、ここで注意しなければならないのは、(10)も(11)も、含意、等値、後件肯定の順接仮定条件と逆接仮定条件の合わせて四通りの論理構造を持っているということである。これまでの考察は、「 \sim テモ」が、周りの状況により、その四通りの論理構造のうちのどれかに（上では、順接仮定条件か逆接仮定条件かに分けている）解釈されてしまうということに関するものであった。次節では、「 \sim テモ」の意味構造に基づく、「 \sim テモ」の論理構造を論理式で記述することにする。

1.2 論理構造

1.2.1 「(未知) テモ (未知)」形式

逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」は、「 p ナラバ q 」を前もって想定し、その想定文が思う通りに成り立たないところに期待はずれを覚える文である。例えば、先の(1)で、「5番バスに乗る」を p 、「市内に出られる」を q とすると、

(1) 5番バスに乗っても、市内に出られない。

は、「5番バスに乗れば、市内に出られる」という想定の前接仮定条件が成り立たないことを表わす逆接仮定の条件表現と見ることができる。1.1節でも述べたように、逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」は前接仮定条件の否定であるため、(1)は、次のように表わすことができよう。

(13) $\sim (p \supset q)$

(13)の中の「 $p \supset q$ 」は「前件真、後件偽」のときのみ偽になる論理構造のもので、これの否定である(13)の「 $\sim (p \supset q)$ 」は「前件真、後件偽」のときのみ真になる論理構造である。逆接仮定条件の「 p テモ $\sim q$ 」は、前件が成り立っても後件が成り立たないものなので、まさしく「 $\sim (p \supset q)$ 」で表わされていると言えるのである。なお、(13)が発話されうる場面は、1.1節の【6】に示した通りである。ただし、逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」は、等値の否定の「 $\sim (p \equiv q)$ 」のように示すことはできない。なぜなら、「 $\sim (p \equiv q)$ 」は、「前件真、後件偽」のとき以外に、「前件偽、後件真」のときも真になるものであって、次の【14】のような場面が考えられるが、この場面と等値とはかみ合わないからであ

る。

【14】 5番バスに乗るトキ、市内に出られることはなく、カツ

5番バスに乗るトキ、市内に出られず、カツ

5番バスに乗らないトキ、市内に出られ、カツ

5番バスに乗らないトキ、市内に出られないことはない。

「5番バスに乗れば、市内に出られる」が等値の論理構造を持つ、ということは、「5番バスに乗る」が「市内に出られる」の唯一の条件だということであって、5番バス以外の、市内に出られるバスは想定されない。それなのに、【14】が成り立つためには、三行目と四行目の前件偽の中味として、市内に出られる、5番以外のバスに乗ることを想定しなければならない。言い替えれば、「5番バスに乗る」を「市内に出られる」の唯一の条件だとすると、【14】は成り立たないということである。つまり、(1)の「5番バスに乗っても、市内に出られない」で代表される「 $p \text{ テモ } \sim q$ 」は、等値の否定と見ることはできないのである。

さて、坂原(1985;127)は、「 $p \text{ テモ } \sim q$ 」を次の(15)のような形式と見ており、(16)の例を挙げて、(17)の論理式で表わしている。

(15) p ならば q 、しかし、 r ならば、 p であっても q でない。

(16) 井上は仕事が早く終われば英会話学校に行く。しかし、同僚から麻雀に誘われるなら、仕事が早く終わっても英会話学校に行かない。

(17) $(\sim r \supset (p \supset q)) \wedge (r \supset \sim q)$

(17)は、暗黙の前提と一般常識とを考慮に入れた論理式である。坂原は、(15)の形式について、言われたことしか考慮に入れずに文面通りに「 $(p \supset q) \wedge (r \supset p \wedge \sim q)$ 」と示すべ

きではない、と述べている。つまり、(15)の「 p ならば q 」を「 $p \supset q$ 」とせず「 $\sim r \supset (p \supset q)$ 」とするのは、暗黙の前提を論理式に組み込まなければならないからであり、さらに(15)の「 r ならば、 p であっても q でない」は、一般常識を考慮に入れると「 r ナラバ [p テモ $\sim p$ テモつまり] 常に $\sim q$ 」であるため、「 $r \supset p \wedge \sim q$ 」ではない「 $r \supset \sim q$ 」とすべきだからなのである。坂原(1985)は、「 p テモ $\sim q$ 」のように、すべての補助仮定が満たされていると見なされる世界から満たされない世界へと言及世界の切り換えが起こったときには、暗黙の前提の一部を、言われていなくても論理式に書き込まなければ、とうていその文章の真意は表現できないとしている。

ところで、暗黙の前提と一般常識まで考慮に入れて論理式に組み込むとなると、その都度、論理構造を変えなければならなくなる。(17)の「 r 」は、満たされていると見なされる暗黙の前提の総称であるとしても、あるいは(16)の「同僚から麻雀に誘われる」という一事例のみ指しているとしても問題がある。前者の場合は、どの条件までを暗黙の前提と見なすか特定できないため、文の内容によって論理構造が変わってくる可能性がある。また、後者の場合は、例えば「 r 」に別の暗黙の前提「 s 」が追加されたとすると、それらを一々論理式に書き込まなければならないため、論理式が次第に膨らんでしまう。

坂原(1985)は、(15)の「 r ならば、 p であっても q でない」を「 $r \supset \sim q$ 」であるとして、「 p であっても」を「 p であっても p でなくても」と解釈しているが、「 p であっても」の箇所「 p でなくても」が入るのならば、(15)や(16)は、次の(15')や(16')のようになるはずである。

(15') r であっても、 p でなければ q でない

(16') 同僚から麻雀に誘われても、仕事が早く終わらなければ英会話学校に行かない。

つまり、(15)の「 r ならば、 p であっても q でない」は、単に「 $r \supset \sim q$ 」とは示せないの

である。本研究では、(15)の「pであってもqでない」は、(1)の文と同じく「 $\sim(p \supset q)$ 」で示し、「rならば、pであってもqでない」は、

$$(18) r \supset \sim(p \supset q)$$

のように示すことにする。(18)は、rが真、pが真、qが偽のとき、真になる論理構造であり、まさに(15)の形式を表わしているものである。

さて、(15)の形式から伺えるように、坂原(1985)は、「pナラバq」を「pテモ \sim q」にさせる条件rを逆接仮定条件と一組で考えており、逆接条件を「rナラバpテモ \sim q」と見ているわけで、逆接仮定条件の論理式に条件rを加えている。本研究では、pとqのみからなる「pテモ \sim q」を基本的な逆接仮定条件の形とし、「rナラバpテモ \sim q」のような組み合わせについては、2節で考察することにする。

以下、「 \sim テモ」の実例を見てみる。今まで述べてきたように、前件と後件に未知の事柄を持つ「 \sim テモ」は、文面の意味構造で、順接仮定条件と逆接仮定条件の区別がつき、基底の意味構造では、順接仮定条件と逆接仮定条件の区別はもとより、順接仮定条件の三つの論理構造の区別がつく。特に、順接仮定条件と逆接仮定条件の区別は、何をqとするかによるものである。

(19) 連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で、正直なところ、渉外にまわっ

ても、成果はあがらない。 (女(上))

(19)で、「渉外にまわる」をp、「成果があがる」をqとし、(19)が「pナラバq」形式の「渉外にまわれば、成果はあがる」を想定している文だとすると、(19)は、「pテモ \sim q」のような逆接仮定条件と捉えられる。このとき、(19)は、「 $\sim(p \supset q)$ 」のように表わせる。この時、「連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で」といった理由めいた条

件を r として論理式に組み込むとすると、(19)は「 $r \supset \sim(p \supset q)$ 」のように示されよう。一方、(19)において、「渉外にまわらない」を p 、「成果があがらない」を q とし、「渉外にまわらなければ、成果はあがらない」という「 p ナラバ q 」を想定しているとする、(19)の「 \sim テモ」は「 $\sim p$ テモ q 」のような順接仮定条件と見なさざるをえなくなる。

そして、当然のことながら、「 p ナラバ q 」を想定している、逆接仮定条件の「 p テモ $\sim q$ 」と順接仮定条件の「 $\sim p$ テモ q 」との間には意味の差が出てくる。つまり、(19)を「 p テモ $\sim q$ 」と解釈する場合と「 $\sim p$ テモ q 」と解釈する場合は、それぞれ(19')と(19'')のような含みを持つようになるのである。

(19') 普段は渉外にまわれば成果はあがるはずだが、人けがまばらな状態だから、渉外にまわっても成果はあがらない。

(19'') 普段でさえ渉外にまわらなければ成果はあがらない。今は人けがまばらな状態だから、(渉外にまわらなければ成果はあがらないのは当然のこと) なおかつ、渉外にまわっても成果はあがらない。

(19)を逆接仮定条件の「 p テモ $\sim q$ 」と解釈した(19')には、条件が条件として働かないことに対する「期待はずれ」もしくは「食い違い」が表わされている。一方、(19)を順接仮定条件の「 $\sim p$ テモ q 」と解釈した(19'')には、想定していた条件以外にその逆の条件が与えられても後件は成り立つという「付け加え」が表わされている。なお、どのような「 \sim ナラバ」表現を想定して「 \sim テモ」文を発するかは話者の心境と関わっており、その解釈は文脈の情報にもよるものなので、これは語用論の問題だと考えられる。さらに、次の(20)の文でも(19)と同様の説明ができよう。⁶⁾

(20) また、きのう、休日返上で出勤する夫に、母の節子が厭味たっぷりに皮

⁶⁾ (20)には「 \sim トモ」が用いられているが、この「 \sim トモ」は「 \sim テモ」と同じ形態と見なす。

肉ったとき、卓次は、ごくおだやかな顔で、しかし、はっきりと言った
のである。「私がこの家にいなくとも何も困りはしないだろう」 (女(上))

(20)で、pを「私がこの家にはいない」、qを「何かと困る」とすると、(20)は、「私がこの家にはいなければ、何かと困る」という想定文が成り立たないことを表わす逆接仮定の条件表現になる。が、pを「私がこの家にいる」、qを「何も困らない」とすると、(20)は順接仮定条件と解釈できるのである。

2 二つの条件を持つ条件表現の論理構造

2.1 「rカラpテモ～q」と「pテモrカラ～q」

逆接仮定条件は想定文通りにならない理由を文面に出すことが多く、順接確定条件「～カラ」と逆接仮定条件「～テモ」が組み合わせられて現われることも多い。ただし、その理由は必ずしも「～カラ」という形で現われるわけではなく、理由と解釈できる副詞句として逆接仮定条件に付けられることもある。例えば、先の(19)の例では、理由は「～テ」という形で現われている。

(19) 連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で、正直なところ、渉外にまわっても、成果はあがらない。 (女(上))

(19)では、点線部が理由を表わしており、これは「連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態だから」と置き換えられる。このように、逆接仮定条件の文中、または文の前後には、想定文の「pナラバq」が「pテモ～q」になる、理由の語句が示されることが多い。ただ、この語句が単なる仮定であってまだ確定されていないとすれば、「連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態ならば」といった条件節と見なさなければならず、このような副詞句の扱いには注意しなければならない。実例を見てみよう。

(21) 僕はだいたい夜遅くまで本を読み朝は八時くらいまで熟睡するから、彼が起きだしてごそごそしても、ラジオをつけて体操を始めても、まだぐっすりと眠りこんでいることもある。 (森(上))

(21)で、「僕はだいたい夜遅くまで本を読み朝は八時くらいまで熟睡する」を r、「彼が起きだしてごそごそする」、または「ラジオをつけて体操を始める」を p、「ぐっすりと眠りこむことはない」を q とすると、(21)は、「rカラpテモ~q」形式と見ることができる。つまり、(21)は、「彼が起きだしてごそごそしたり、ラジオをつけて体操を始めたりと、ぐっすりと眠りこんでいられない」はずだが、「だいたい夜遅くまで本を読み朝は八時くらいまで熟睡する」から、「彼が起きだしてごそごそしたり、ラジオをつけて体操を始めたとしても、ぐっすりと眠りこんでいられる」ということを表わしているのである。既知の事柄を F(x) とすると、(21)は、

$$(22) [r \supset \sim (p \supset q)] \wedge F(r) \Rightarrow \sim (p \supset q)$$

と表わせるであろう。もし、理由を敢えて言う必要がないのなら、r が省略されて「~(p ⊃ q)」の論理式で表わされる「p テモ ~q」形式になる。さらに、場合によっては逆接の条件 p が省略されることもあり、そのときは、「(r ⊃ ~q) ∧ F(r) ⇒ ~q」などと表わされる「r カラ ~q」形式になる。ただし、~q が省略される「r カラ p」形式は成り立たない。同じ形式で、「~カラ」が使われる代わりに、理由を表わす副詞句が用いられる例も多い。

(23) 札幌住民の宴会に 鮭の焼き物や、イクラのあえたの、三平汁など出されても、うれしくも珍しくもない。 (女(上))

(24) フランス料理のことなど素人同然で、帳簿を見ても何が何だか判らず、接客の術もまったく知らない。 (花)

(23)では「札幌住民は普段、鮭の焼き物や、イクラのあえたの、三平汁など食べているから (そのような札幌住民の宴会に)」が、(24)では「フランス料理のことなど素人同然

だから」がそれぞれの r に当たる部分である。例えば、(23)は「宴会に鮭の焼き物や、イクラのあえたの、三平汁などが出されると、うれしくもあり珍しくもある」ことを想定していたが、「札幌住民の宴会」だから、p が成り立っても q が成り立たず、想定通りにならない、ということを表わしている逆接仮定の条件表現である。次は、「p テモ r カラ～q」形式を見てみる。

- (25) 傘の上に降り落ちても、そこに積もるに必要な湿り気がほとんどなく、さらさらすべり散ってゆく。 (女(上))
- (26) この吹雪では、タクシーは拾えないだろうし、無線タクシーを頼んでも予約でいっぱいになっていて、時間がかかるに違いない。 (女(上))
- (27) 十一時が閉店と決めてあっても、食事の終わっていない客を追い出すわけにはいかず、たいてい十二時近くになってしまう。 (花)

これらの例に「～カラ」は使われていないが、点線部にカラに相当する理由の副詞句が記されている。(25)では「そこに積もるに必要な湿り気がほとんどないから」、(26)では「予約でいっぱいになっているから」、(27)では「食事の終わっていない客を追い出すわけにはいかないから」がそれぞれの理由 r である。

例えば、(25)では「(雪が) 傘の上に降り落ちる」が p、「(雪が) さらさらすべり散らない」が q であり、「p テモ r カラ～q」形式を成している。(26)では、無線タクシーを頼んでも時間がかかる理由は「予約でいっぱいになっているだろう」からであり、無線タクシーを頼もうとする理由は「普通のタクシーが拾えないだろう」からである。また、普通のタクシーが拾えなかったり無線タクシーが予約でいっぱいになっているだろうと思わせる理由めいた条件は「この(ような、すごい)吹雪だ」であるが、先にも言及したように、このような語句は「こんなに吹雪がひどければ」のように条件節の形としても、また「こんなに吹雪がひどいから」のように理由節の形としても逆接条件文の前に付くことが

できる。なお、次のように、順接確定条件「～タラ」が「～テモ」と一緒に用いられることもある。

(28) 鈴木が木村に返したハンカチを、富岡はうむを言わず彼の手から奪い取った。じっくりと見つめている。ひとり言のようにつぶやく。「洗濯しても、ここまできたらもう無理ね」 (女(F))

(28)の「～タラ」は、順接仮定条件 $p \supset q$ と実際起こった $F(p)$ とが前提になって結論 q が推論される順接確定の条件表現である。(28)は、 q の「もう無理ね」という話者の判断の根拠として p の「洗濯する」が出され、これに「ここまできた」という r が付け加えられているものである。

上の(25)、(26)、(27)、(28)のいずれも、「 p テモ r カラ $\sim q$ 」形式は、先の「 r カラ p テモ $\sim q$ 」形式同様「 $[r \supset (p \supset q)] \wedge F(r) \Rightarrow \sim (p \supset q)$ 」で表わせる。そして、「 p テモ r カラ $\sim q$ 」形式は、 p が省略されて「 r カラ $\sim q$ 」になったり、 r が省略されて「 p テモ $\sim q$ 」になったりすることもある。

ところで、「 p テモ r カラ $\sim q$ 」形式は、 $\sim q$ が省略され、「 p テモ r 」という形で文に現われることがある。つまり、本当の後件は省略されて、理由の事柄が後件の位置に現われる場合である。次の例を見られたい。

(29) 「ぼくの絵をあつかってみてもいいっていう画廊があらわれて、そのためには、まず最初に、やっぱり個展をひらかなきゃいけないらしいんです。でも、ぼくは三年前に絵をやめて、勤めに出たもんですから、作品の数が少ないんです。いま新しい作品を描いてますが、幾ら急いでも、ぼくは機会じゃありません。それに……」 (花)

(29)で、「急ぐ」はp、「ぼくは機会じゃありません」はrであり、「多くの絵が描けない」のような $\sim q$ は文の中に隠されている。このときの論理構造を「 $\sim (p \supset r)$ 」と示せないのは勿論のことであり、論理式には $\sim q$ を補充して、「 $[r \supset \sim (p \supset q)] \wedge F(r) \Rightarrow \sim (p \supset q)$ 」としなければならないであろう。ちなみに、坂原(1985)はこのような条件表現を、疑似譲歩文と呼んでいる。他に、次のような例が挙げられる。

(30) 秘密の博打場に出入りしているのを、警察に通報しても、罰金程度で済んでしまうでしょう？ (花)

(30)で、「警察に通報する」はp、「罰金程度で済んでしまう」はrであり、「罰が軽すぎて懲らしめにならない」のような $\sim q$ は省略されている。このように、日常言語では $\sim q$ の省略された「pテモr」のような表現が、「pテモ $\sim q$ 」と一緒に実際使われている。これらは、異なる構造であるにも関わらず、一見同じ形式に見えるので、そこから曖昧さが生じることもあるのだと思われる。なお、(30)のrを「秘密の博打場に出入りしているくらいだから」と捉えると、(30)は「rカラpテモ $\sim q$ 」形式と見ることもできる。そのため、何をpとし、何をrやqとするかは、条件表現の論理構造を調べる上で大事なことである。

2.2 「rナラバpテモ $\sim q$ 」と「pテモrナラバ $\sim q$ 」

「rナラバpテモ $\sim q$ 」は「(pナラバqだけど)rナラバpテモ $\sim q$ 」のパターンの組み合わせである。先の坂原(1985)の(15)の形式がこれに当たる。「rナラバpテモ $\sim q$ 」は、rとpの順序が変わって「pテモrナラバ $\sim q$ 」となることもある。これらの組み合わせは、両方とも「 $r \supset \sim (p \supset q)$ 」という論理式で表わせる。これらのパターンは、rが省略されて「pテモ $\sim q$ 」になったり、pが省略されて「rナラバ $\sim q$ 」になったりすることもある。

例えば、先の(23)の点線部の、

(23) 札幌住民の宴会に鮭の焼き物や、イクラのあえたの、三平汁など出されて
も、うれしくも珍しくもない。 (女(上))

「札幌住民の宴会に」を「札幌住民の宴会ならば」と取れば、(23)は「rナラバpテモ～q」
であると解釈することができる。

3 本章のまとめ

本章では、「pナラバq」を想定する「pテモ～q」を逆接仮定条件と見なし、その論理構造を分析してきた。逆接仮定条件「pテモ～q」は、含意の否定の「 $\sim(p\supset q)$ 」と表わすことができる。ただし、逆接仮定条件「pテモ～q」は、順接仮定条件「 $\sim p$ テモq」とは区別される。「pテモ～q」と「 $\sim p$ テモq」は、両方とも「pナラバq」が想定されているが、「pテモ～q」は、pとqの関係が想定文通りにならない「食い違い」を示すものであるのに対し、「 $\sim p$ テモq」は、pとqの関係が想定文通りに成り立つのはもとより、 $\sim p$ のときもqと結び付くという「付け加え」を表わしている。このように、「 \sim テモ」は、順接仮定条件と逆接仮定条件の論理構造をともに持っているが、そのどちらに解釈されるかは、周りの状況によるものと思われる。

さらに、「pナラバq」が「pテモ～q」になる理由や条件が「 \sim テモ」と一緒に組み立てられることもある。その場合は、「rカラpテモ～q」や「rナラバpテモ～q」のような形式として文面に現われ、それぞれ「 $[r\supset\sim(p\supset q)]\wedge F(r)\Rightarrow\sim(p\supset q)$ 」や「 $r\supset\sim(p\supset q)$ 」のような論理構造を持っていると考えられる。なお、「pテモrカラ～q」は、 $\sim q$ が省略され、「pテモr」だけが文面に出てくることがあるが、「pテモr」と「pテモ～q」は明らかに異なる論理構造のものである。それに関わらず、これらは実際の文では同じように見えてしまい、混乱を起こすこともありうる。しかし、条件表現の本当の意味構造を調べるには、言語形式や文面の意味構造だけに囚われてはならない。